

群馬県高崎市・八百屋の祖父思い浮かべ

「野菜王国」とも言われる群馬県で生まれ育ちました。祖父が八百屋を営んでいたこともあり、画題として野菜を描く時は

自分のルーツであると感じています。ただ子供の頃は、リヤカートで野菜を運ぶ作業着姿の祖父が恥ずかしくて、リヤカートを押す勇気はなかなか持てませんでした。

突然、家族の似顔絵を描き出したり、堀に落書きしたりする

した環境が影響しているのだと 思います。

元々は、漫画家に憧れていま

した。そこが、肝心のストーリーがうまく考えられなくてあ

えなく挫折。ある漫画に登場す

るよう見えたのと、「絵は一生をかけてできる仕事」と考へ、上京して東京造形大に進学しました。

大学時代、作品が子供に怖が

られてしまったことにショックを受け、何も作れなくなつた時期がありました。そんな時に目にした新緑の葉っぱの輝きに感動し、葉っぱをテーマにした創作を始めました。

葉っぱを原寸大で描く今のスタイルを確立するには、10年ほどかかりました。野菜の絵を描き始めたのは、高崎市の母校に寄贈する絵に大根を描いたのがきっかけです。かつ

ては恥ずかしいと思っていた祖父の姿が、気取らずに働く美しい姿だったことに気づいたのもこの頃になります。今も

野菜を描く時は、昔押せなかつた祖父のリヤカートを押すような気持ちで画題と向き合っています。

2019年に伝統ある英國王立園芸協会の植物画展に出演した連作「下仁田ネギの一生」が、最高賞を受賞することができます。

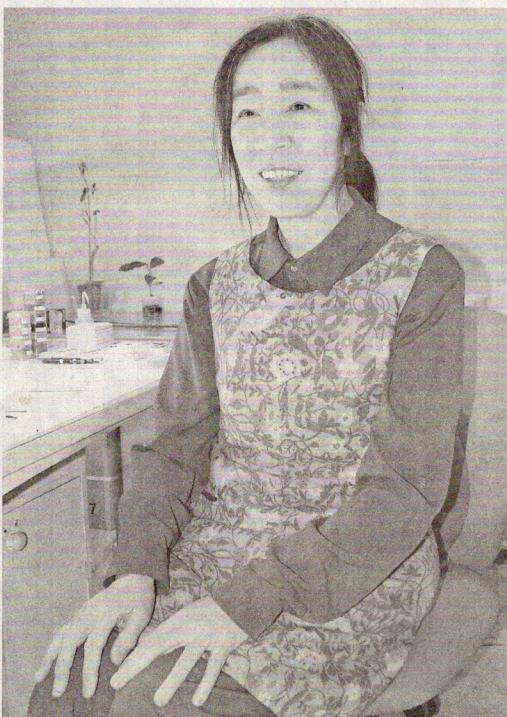
今後は野菜を描いた本をまとめて、映像化することを考えています。これからも故郷で育んでもらつたことを忘れずに、一枚一枚の葉っぱや野菜の輝きを描くことで恩返ししていきたいですね。

(聞き手・斎藤茂郎)



葉画家

ぐんまなみ
群馬直美さん 62



【思い出の品】自分で描いた漫画

小学生の頃は、ギャグ漫画や少女漫画をよく描いていました。今読み返してみると、オチや内容がよくわからないものがほとんどだけれど、続けていたら新しい漫画のジャンルを作っていたかもしれませんね。

もともとモノクロの作品でしたが、友達の誕生日会に呼ばれた際、頼まれてもいいのに色を塗って持って行き、紙芝居のように読んで聞かせました。みんなが喜んでくれて、自分も楽しかったことを覚えています。



は、会話と
同じコミュ
ニケーションの一つだ
つたのかもしれません。

当時は近所に裕福な家も貧しい家もあり、どの家の子とも分け隔てなく遊んでいました。現が等しく大切」という気持ちで描いているのは、幼い頃のこう